

第 55 回 Kozoom28 「正月の風物詩あれこれ」

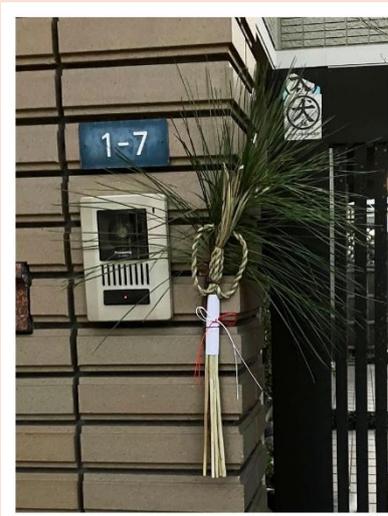
清水健二

元旦の前夜には、大晦日の真夜中に近くの寺へ除夜の鐘を撞きに出かけ、1人1回で108人が順番に鐘をついて福餅を頂いて帰宅していた。最近ではコロナ禍と寒いことから横着して、寝床の中で鐘の音を聞くようになってしまった。しかし翌朝の元旦には朝早く起きて、氏神さんにお参りして今年も無病息災と家内安全を祈願してきた。夕べには寺へ朝には神社を訪ねることは、仏教も神道も関係なく日本人の日常は神仏習合の生活である。日本人は古代から自然崇拝の歴史を続けてきた背景に、野山の幸、海の幸の恵みを頂いてきた民族だから、自然の神への感謝の気持ちを伝え、神へ供物を捧げる行事を季節の節目、節目におこなってきた。

特に年の始めには家へ神様をお呼びするため、玄関に注連縄(しめなわ)と白い半紙の紙垂(しで)をつけて、神聖で清浄の場所を作り神様を迎え入れるのである。紙垂は雷光や稲妻をイメージし、家の中では神酒と鏡餅を供えておくのである。注連縄や鏡餅に橙(だいたい)を



注連縄と橙(玄関入り口)



門松(玄関入り口)

つけるのは橙は実が熟しても落ちないことで「代々栄えるという」意味があると親から教えられた記憶がある。一方家の入口に松の枝を飾る門松は、中国が発祥で松は長寿を示し、日本でも平安時代の貴族から始まり、松と竹と一緒に飾る風習は江戸時代から庶民にも普及したようである。

そんな正月の飾り物も最近ではめっきり少なくなった。正月に散歩しながら町を歩き、眺めてみたが門松の立ててい



綱と紙垂のみ(右は杉玉)



我が家の飾り注連縄

た家は皆無に等しかった。私の居住するところは古い町で比較的旧家のある地域だけに意外

だった。私は小学校(当時は国民学校)低学年の頃に大阪市内の貧乏長屋に住んでいたが、どこの家も入口には門松を立て、日章旗を掲げていたものである。話は元に戻って、今住んでいる町筋には白壁の蔵があったり、木の格子戸の家が残っていたりするが、門松はなくても



八尾市内の旧家(元漢方薬店)



八尾市内の旧家(銘菓本店)

橙をつけた注連縄を玄関入口の上に飾ってある家は数軒あった。しかし思ったほど多くはなかった。昔漢方薬を売っていた旧家も、代々続いている茅葺きの屋根の残っている老舗の銘菓店でさえ、門松も注連縄も飾らなく寂しいものだった。

最近では農業を生業にし自然の有り難さに感謝する家はなくなって、神様を迎え入れるような気持ちもなく、そんな行為に意味を感じていないと言えよう。しかし神社には松竹梅(梅だけは造花)に千両や万両の赤い実を添えたり、葉牡丹の華やかな鉢植えを備えて参拝客を楽しませている所が多かった。寺でも葉牡丹を飾り彩りを添え新年を晴れやかに迎えていた。葉が幾重にも包み込む様が「愛を包む」とか花言葉でも「祝福」として縁起が良い花とされているからだろう。



古刹の葉牡丹飾り鉢

近年、神社に大きな絵馬が飾られている所が多く、今年は蛇(巳)の絵柄はそれぞれ工夫されていて観ていて楽しいものだった。私の絵の先輩の K 氏が毎年八尾神社に絵馬を



八尾神社の絵馬



八尾天満宮の絵馬

奉納して今年も拝見した。昨年春に彼岸に旅立ったのに、すでに今年の「巳」の絵が用意されていたのには、在りし日の氏との思い出を懐かしく感じた。私は個人的に小さい絵馬を描いたのでご笑覧願いたい。

唱歌に「お正月」という歌がある。(♪もういくつ寝るとお正月 お正月には凧上げて、コマを回して遊びましょう…)

また「1月1日」の歌には(年の始めのためしとて 終わりなきよのめでたさを 松竹立てて 門ごとに 祝う今日こそたのしけれ)と正月の風物詩を歌っている。

もはやそんな光景は見られなくなった。まさに昭和は遠くになりけりの感である。

正月の飾り物と共にお節料理も色々工夫があって郷土色豊かである。50年ほど前には3世代家族が多く、大量の食材を準備する家が多かった。餅は家族全員で餅つき作業をしている光景があちこちで見られたものだった。お節の食材はほとんどが地元で生産された作物であり、海に近い所は魚介類が主流だった。今は少子高齢化で少量で済むようになったばかりか、郷土色が薄れ食材は多種多様で、手のこんだ出来合いのものが容易に購入でき、しかも見栄えは驚くほど立派である。

我が家でも正月料理は作らなくなって注文したものになってしまった。しかし雑煮は手作りの味噌味のもので、素材の味をたのしんでいる。続く1月7日は「七草粥の日」でこれも野菜の香りをかぎながら味わった。

日本の料理はもともと食材の新鮮さを大事にして食していた。刺し身は素材そのものだし、肉もしゃぶしゃぶ等実に美味である。10年ほど前にユネスコの無形文化遺産として和食が登録され、以来日本食が海外で好評であるのも、新鮮かつ健康的であり、料理の盛り付けの美しさ、器の形や絵柄などに気配りした美的さに、訪日客からも評価されてきたからであろう。何より季節の行事と結びついた日本文化が継承されてきた。ところが徐々に日本人の日常生活が洋風化し、利便性を求めて加工食材が普及すると共に重厚な味のものが一般化してきた。食料自給率はカロリーベースで38%で先進国の中でも最低レベルと言われている。しかも食品ロスが増え続けていることを思うと、かつての農・漁業民族として、自然の恵みを頼りに生きてきた時代を顧みる必要があるように思う。

正月には新しい1年が平穏で、自然災害の恐ろしさに会わないように祈り、神を迎えて感謝



と敬意を払い供物を捧げて祝ってきた人々の心を取り戻すべきだと思う。人類のエゴが地球温暖化をもたらし、自然の怒りを誘う生き方は慎むべきだと感じている。それでも文明の名のもとで時代は変化していき、正月の風物詩も消えて行くだろう。記録として残ることになっても、自然への崇拜の心や、鎮魂の祈りを持ち続けていける世の中であって欲しいと願わずにはおれない今年の正月であった。

令和7年1月 記